

⑱ 福井大地震

昭和二十三年六月二十八日。あの日は、むしっとした

てきない日ひで、私は清水町の山の頂上うへで仕事しごとをしての。

三時さんじの一服いっぷくの時とき、ひよいと西にしの空そらをみると、

黄色きいろい雲くもの帯おびの上に紫むらさきの雲くもの帯おびが真横まよこに出でていたんや。

その二時間じかんあとの夕方ゆづがた五時ごじに、あの大地震おおじしんや。

直径ちゆうけい一メートルもある木きが、箸はしを指先ゆびさきでゆらすようにゆれだした。

西袋にしふくろの山やまの上うへから木きの葉はが白しろう裏うらがえって波なみのように下くだってから、

私わたしのいる山頂さんていにのぼってきて東ひがしの上河内かみこうちの山やまへ行いったんや。空気くうきも振動しんどうしたんやろ、空そらをとんで

たハトやカラスやトンビが地面じめんにおちてきたほどだった。

どうにかこうにか山やまをおりると、大川おおかわは茶色ちやいろくにごって、四・五十センチも水みずかさかさがふえてい

た。長生ながいきしたけど、あんな経験けいけんはあとにも先さきにもないねえ……。



⑲ うるしかき

「おじいさん、『うるしかき』ってなんやうしたの。」

「さわるとかぶれるあの漆しは漆しの木きからとるんや。木きにきずをつけて、そこから滲にじみ出でてくる液えきを集あつめる仕事しごとや。うるしの里会館さとかいかんにきずのついた木きがかざってあったやろ。」

「ああ、見た見た。おじいさんもやったことあるの。」

「若い頃わかにな。」

「教えてよ。」

「うん。いい漆しの木きがある山やまは主おもに東北とうほくや関東かんとう・中部地方ちゅうぶちほうや。汽車きしゃのないころは、わらじをはいて、テクテクと歩いていった。青森あおもりまで一月ひとしきもかかったそうさ。春田はるたう植うえがすむと、村むらの元氣げんきな男おにいは連れだつて出でかけた。十一月がつまで半年はんとしも家いえには帰かえられん。誰だれもえん山やまを一人ひとりで、朝早あさばようから漆しの木きに登のぼって、先さきの曲まがった掻かき鎌かまで木きにきずをつけて、しみ出でた液えきをとる。一本いっぽんきずをつけて漆しをとると、その木きは中三日なかみっかは漆しが出でるので、休やすませて、四日よっか目にまた一本いっぽんきずをつけて

漆をとる。一人が四百本うけもって、一日に百本漆をかけば、毎日仕事ができるあんばいや。「どうやって集めたの。」

「朴の木でつくったチャンポにへらですくいとって入れる。高い所は、はしごをさしてとった。盛りには一日八百匁もとれた。一年で二十貫ほどとった。」

「儲かったんか。」



「まあまあやった。外国から安い漆が入らんようになったころは儲かった。損した話もきいた。帰りの宿でバクチうって、すっからかんになったとか、集めた漆を輸送の途中で取られてしもたとか。」

「いつ頃から始まったの。」

うるしおきさんは
鳥の性を得たか
朝の早いから木のそらに

「江戸時代らしい。昭和三十年ころはほんの少しになって、

そのうち止んでしもた。」

「昔の人は苦労したんやね。」

かわいい子をおき
妻をもおいて
行くは河和田のうるしおき

「そうや。みんな辛抱強かったんや。農家の隅っこ借りて自炊した。おかずはちよつとや。雨降りには仕事ができん。晴れると朝はつす暗いうちから出かけて、暑い日中だけ休んで、日が暮れて戻った。」

「ああ、言い忘れるとこやった。漆かきに出かけたのは、河和田や服間の人で全国で一番多かった。粟田部で作る漆かきの鎌が全国一いい品で、そこでしか作らなんだのと、米作りのわりとひまな夏場が漆かきの時期やったからの。」

② 余加の草分け

北中、寺中、清水町あたりをうんと昔は余加というたそうな。余加の開祖は有平という人だ。この人は実母に死別れて、京の都から近衛中将隆澄卿と一緒にこちらに来て、この地に住みついたとか。